

(続紙 1)

京都大学	博士（地域研究）	氏名	清水 加奈子
論文題目	スリランカの清掃労働者集落 —「確かにそこに居る／在る」ことをめぐる民族誌的研究—		
（論文内容の要旨） 本論文は、スリランカ北西部州K町の地方自治体雇用の清掃労働者集落Lの人びととの関わりから、無いようにされている人やモノ、事物や情動が「確かにそこに居る／在る」ことに、目を凝らし耳を澄ませる民族誌である。「無いようにされているものも『確かに居る／在る』」という主題は、本論文の書き方にも関わる。本論文は、フィールドに居た／書いている身体と情動を書き込みながら、L集落の人びとを集合的表象に当てはめ分かり易い物語に収めることを避けつつ、出来事の詳細を極力省かないように書かれた。 第1章では、こうした書き方についての意味づけを述べている。まず研究者の身体や情動が研究成果では不可視化されてきた背景に触れ、研究者がフィールドでの自身の身体と情動に向き合うことが、出会った人を文化的他者として理解することではなく、居合わせた人として感応していくことに向かうことを述べる。オートエスノグラフィとの関連に言及しながら、自身にせよ他者にせよ、社会的属性によって位置づけて書く限りは、不可視なものが確かに在ることを重視する姿勢につながらないと指摘する。さらに、不可視化／無いようにすることが、「現実のむずかしさ」に対処する「逸れ」の一種であり、それが不可避なものであることを認めつつ、「逸れ」そのものを隠蔽する＝不可視化／無いようにされているものの存在を信じられないように仕向ける、近代西洋的な学問と統治の基礎である提喻的分類の問題（それによる自他の想像、同化／他者化）に触れ、そうした自他の想像の中ではこの論文を書けなかったこと、書けるようになったのは、著者が記号（形に表れたもの）＝可視なものとその意味（価値）のつながりの恣意性、それ故の意味（価値）の無限の広がり、観念的な理解ではなく、信じることができるようになったためであると述べる。 第2章「居ないのに居る死者」では、著者自身や集落の人びとの中にある死者の存在について辿る。その中で、集落が実現してきた物質的「よりよさ」が必ずしも幸福感につながらず、むしろ死者の思い出から想起された過去が幸福なものとして、現在の生き辛さの語りを引き出していた。そこで生き辛さに関わる「責任」についての語りが見出される。 第3章「在るのに無いことにされているゴミ」では、雑多で多義的なゴミの存在感と、10年前に著者がボランティアとしてゴミ処理場で分別作業をしていた時の経験を書き、作業員たちとの笑い話、その裏にある悲哀に触れる。そして、役場の職員が集			

落住民を他者化し、著者自身が職員を他者化して集落住民に同化を試みたこと、それによって無かったことにしていた職員の悲哀に触れた経験を、この章を書くことで思い出し、ただ「そこに居る／在る」ことに立ち返ることが、同化／他者化を無効にする可能性について気づく。

第4章「『よりよく』する責任」では、集落や自分の人生を「よりよく」しようとする人びとがそれに向け自分の責任の範囲と形をどのように想像しているかを考える。その中で、「責任」を果たすことは役割を引き受け、それに期待される行為の型に沿うことでもあり、それは時に同化／他者化を伴い、ただ居合わせること、その中で築かれた関係性を塗りつぶしてしまう可能性を見出だす。

第5章「『よりよく』なる夢」では、集落で子供の教育に託される「よりよく」なる夢には、親たちの切実な祈りが込められていながら「責任」と同様、やはり一定の行為の型があらわれることを見出す。型通りに振る舞えない者は、胸の内にあるかもしれない祈りさえも無いことにされ、居た堪れなくなるのではと考え、それは次章に接続していく。

第6章「居るのに『居させてもらえない』」では、拘置所を出入りする、かつて一緒に働いていた者たちについて記述している。一人は著者に「居させてもらえない」という自身の感覚を語った。著者は彼らの薬物使用や暴行の事実、拘留の様子に動揺しつつ、そうなることの裏にある悲哀を自分と重ね、自他が混然となった祈りを持つ。記号とその意味との結びつきを自由に捉えるようになる中で、著者はただ居ることそのものとその可能性に希望を抱くようになり、その中で集落の友人が言った「神が見ている」という言葉がそれまで気づかなかった意味を帯びるようになった。その言葉は特定の信仰の表明というよりも、誰からも見放されたように思う時であっても確かに誰かは居るというリアリティを持つことだった。

第7章「確かに居る／在ること」では、集落の人びとと著者が、自分が誰で何をしているのかについて型にそった語彙と振舞いで承認を得なくては「居させてもらえない」という思いに駆り立てられていることを確認する。「確かにそこに居る／在る」ことに立ち返ることは、行為の型を含めた記号とその意味（価値）の結びつきの忖度性と、その手前でただ居る／在るものと自分が居合わせていることに気づかせる。そこで、やはり特定の意味と結びついた記号（行為や言葉）でなければ誰にも見えてもらえないのではという不安を、誰かは必ず居るというリアリティ（「神が見ている」）が拭う。そして、居合わせることで生まれる感応が、多くの差異にも関わらず人びとを思いがけない形でつないでしまうことに触れる。最後に、集落での祭りの日、悲哀の只中にある集落の友人が踊るのを見た時、条件付きの肯定ではない、ただ「そこに居る／在る」ことへの肯定が著者の中で確かな言葉に結実したことが描かれている。